

子どもの本

研究会



【私の一冊】

『蜘蛛の糸』

芥川龍之介著

増田 素美子

(通称 すみママ)



娘の部屋に入ると、枕元に一冊の本がありました。『声に出して読みたい日本語』齋藤孝著。日本語ゲームの火付け役ともなった国民的ベストセラーが、秋の夜長のガイドブックなのでしょうか、美しい日本語の響きに触れながら心磨きをしているようです。「声に出して読む」とが生業の私は少し嬉しくなり、改めてパラパラと捲ってみました。この40数年間幾度も幾度も声に出し、赤本としてきた「言葉たち」が豪華に並んでいます。

「或る日のことです」といいます。御釈迦様は・・・で始まる『蜘蛛の糸』に目が留まりました。芥川龍之介が初めて書いた児童文学作品で、朗読教材として最初に出会いました。優雅で煌びやかな極楽の様子を、暗記するほど反復練習したのですが、この『蜘蛛の糸』は、全編声に出してゆっくり読んでみても十数分の短編なので読み易くもあり、何より芥川が子どもたちに伝えたかったメッセージが推察できる教本であると思います。

極楽とは真逆の地獄の様子を覗き、罪人への報いを思いつく御釈迦様。それに浅ましくも繋り付く無慈悲な男。読む程に自問自答の問題提起があります。時間が止まってしまったような金色の世界で、御釈迦様は万人に手を差しのべているのでしょうか。或いは退屈凌ぎの気まぐれだったのでしょうか。せめて凧糸位お降しになれば・縄跳びの縄か綱引きの綱だったら・なんてタラレバの空想に更けながら、男の罪の重さを量り知るのであります。それでも世間は更正の機会を与えてくれる、今も昔も。多角度的に人としての道を考えさせられます。

さて「声に出して読む」とは。単に文章を声に出して読むは「音読」、読み手は言葉の響きを感じることができます。そこに感情を込めて読み上げるという意味合いが含まれると「朗読」です。朗読は聞き手にも共感を与えます。無機質な活字に読み手の体温が伝導し言葉に生命が吹き込まれるのであります。親子でその温度と共に感じながらの「読書の秋」は如何でしょうか。御釈迦様の真意が見えてくるかもしません。

(ラジオパーソナリティ・話座素まいる主宰)